

今号から接続法の用法を扱います。中級レベルの学習者からも多くの質問が寄せられるテーマの1つです。まず、「接続法」という用語ですが、これはスペイン語の“modo subjuntivo”の訳です。“subjuntivo”は「接続の、従属の」といった意味です。接続法はそもそも従属文に使われるところからきているのです。ただし、これはスペイン語の祖先であるラテン語での話であって、スペイン語では従属文でのみ使うということではありません。ですから、学習者は「接続法」という用語にあまりとらわれない方がよいでしょう。一方、“modo”は「法」と訳されていますが、これだとわかりにくいのも無理ありません。“Modo”はスペイン語で「方法、様式」などの意味なのですが、「ムード、モード」と言うイメージが湧きやすいかもしれません。「私は今、仕事モードだ」などと言う時の「モード」です。要するに「法」とは、話者が述べていることに対する「心的態度」を表現したものです。

直説法と接続法を以下のように整理してみましょう。

- ・直説法(modus indicativo): 叙事法, 客観的, 事実, リアル
例) **Sabemos que tú estudias mucho.**
- ・接続法(modus subjuntivo): 叙想法, 主観的, 非事実, イマジネーション
例) **Queremos que tú estudies mucho.**

本号では名詞節を扱いますが、網羅的に説明するのではなく、初級段階ではあまり触れられないいくつかのトピックを取り上げます。

まず、接続法使用の代表的な構文として「動詞 + que + 接続法」があります。

Espero que Juan venga hoy.
ファンが今日来ることを期待する。

Esperarの他に、同じ構文をとる動詞はquerer, desear, mandar, pedir, permitir, prohibirなど多数あります。ところで、動詞の中にはque以下に直説法と接続法の両方の可能性を持つものがあります。例えば、decirやescribirといった伝達の動詞は、通常は直説法を取りますが、「命令」の意味で使用されることがあり、この場合は接続法を取ります。

Tus compañeros dicen que tú nunca llegas tarde a clase.
クラスメートは君が決して遅刻しないとやっている。

¡Ya te he dicho mil veces que no llegues tarde a clase!
授業に遅刻しないようにと千回言ったでしょう！

「信念」や「疑い」の動詞において「信じる、疑わない」の意味だと直説法で、反対に「信じない、疑う」ならば接続法が来ます。

Creo que viene Carmen.
カルメンは来ると思う。

No creo que venga Carmen.
カルメンが来るとは思わない。

初級段階ではこのように「creer + 直説法」、「no creer + 接続法」と習っているかもしれませんが、現実はまだ少し複雑です。

¿Pero, no crees que estoy enfadada contigo?
で、私が怒っているとは思わないの？

¿No crees...?は、「...と思わないの?」ですが、この例文では単に質問をしているのではなく、「...ということを理解してよ」と主張を反語的に表現して

いると言えます。つまり、「私、あんたのこと怒ってるんだからね」というわけです。そこで直説法がより適しているわけです。

直説法は事実を表現し、接続法は事実でないことを表す、と理解している学習者は多いでしょう。しかし、実際には事実であっても接続法になることがよくあります。例えば、感情の表現です。

Me alegro de que se haya recuperado usted tan pronto.
あなたがこんなに早く回復されて嬉しい。

この例では「病気から快復した」のは事実なのですが、接続法でないと間違いになります。これは快復したという事実を伝えたいのではなく、焦点はむしろ「私は嬉しい」にあるからだと考えられます。つまり、接続法は「判断を保留」する形式、「事実であるという主張をしない」形式なのです。

次の評価の表現ではどうでしょうか。

Es muy bueno que desde niña hayas comido verduras variadas a diario.
君が子どもの頃から毎日いろんな野菜を食べてきたのは、とてもよいことだ。

この例では、「君が毎日いろんな野菜を食べてきた」ことは事実であるけども、話者の主張の力点はそれが「とてもよいことだ」の方にあります。

続いて、名詞修飾節のel hecho de que「～ということ」という句を見てみましょう。

Muchos japoneses no saben el hecho de que el español se habla en más de 20 países.
多くの日本人はスペイン語が20ヶ国以上で話されていることを知らない。

Hechoという名詞自体が「事実」という意味ですので、直説法が使われて当然だと思われるかもしれませんが、実際には接続法が来る場合もあります。

El hecho de que el español se hable en más de 20 países me ha motivado mucho a estudiarlo.
20ヶ国以上でスペイン語が話されているという事実は、僕がそれを勉強するモチベーションとなった。

この例文ではなぜ接続法が使われているのでしょうか。そのカギは情報構造にあります。この例文で伝えたいことは、「スペイン語が多くの国で話されている」という事実ではありません。これはもちろん事実には違いないのですが、むしろ「そのことが私にモチベーションを与えた」いう方に力点があります。そこで、el hecho de que以下に接続法を使うことによってその主張をやわらげ、後半部分(それがモチベーションになったこと)をより際立たせるということなのです。

接続法の用法は複雑ですが、たいへん興味深いテーマです。多くの優れた研究がありますので関心がある方は当たってみましょう。



仲井 邦佳 / Kuniyoshi Nakai

立命館大学産業社会学部教授。専門はスペイン語学。著書に『はじめてのエスパニョール』(共著、三修社)、『中級スペイン語一文法と演習』(共著、同学社)などがある。